表5　研究方法別にみた論文の割合の年代別推移

研究方法	年	1979-1983	1984-1988	1989-1993	1994-1998	計
	N	32	29	53	75	189
事例研究		56%	35%	17%	22%	28%
調査研究		35	59	51	38	44
文献研究		3	3	4	4	4
質的分析研究		6	3	28	36	24

表6　国内誌・国外誌に掲載された論文の割合の内容別比較(1994-1998)

内容	基本問題	直接看護	看護技術	地域・家族	学生・職員教育	その他
国内誌(N=75)	16%	17%	40%	4%	11%	12%
国外誌(N=215)	28	20	17	16	4	15

Ⅱ．泉キヨ子：転倒防止に関する研究の動向と今後の課題，185~193.

1．方法

日本における転倒に関する文献から看護の視点や看護に活用できる研究の現状と今後の方向性について検討する。

2．文献の範囲

「医学中央雑誌」CD－ROM 版

1）1980 年～1993 年

ｷｰﾜｰﾄﾞ：(転倒のｷｰﾜｰﾄﾞなし)“事故”“事故防止”“看護－老人”“老年者”“骨折”“歩行”

“病院管理”　　“動揺”

2）1994 年 1 月～1999 年 12 月：

ｷｰﾜｰﾄﾞ：“転倒”“転倒＋事故”“転倒＋事故＋看護”

3．　転倒に関する研究

CD－ROM による転倒のヒット件数は 829 件、そのうち転倒の看護に関する文献(“転倒”“転倒＋事故”“転倒＋事故＋看護”) は 118 件であった。

転倒はすべる、つまづく、ふらつくなどにより起こるが、その定義は研究者により異な

る。同様に転倒者についても調査期間中１回でも転倒した者を指す場合や年間２回以上転倒して者を指す場合もあり研究者により異なる。わが国の転倒防止や予防に関する看護研究で最も多いのは、その施設や地域における転倒についての調査研究である。

４．施設における転倒発生状況

施設による発生頻度は（転倒率）は研究者による違いがあるが、ほぼ 20~40％である。１老人保健施設１年間における高齢者全員の Prospective 法による結果では転倒経験者の１人あたりの転倒回数は 3.2 回で男性に多い。また転倒に関連高い項目は脳神経疾患、性別、睡眠薬の服用、移動手段の順であった。転倒のきっかけは、車椅子やポータブルトイレへの移乗中、トイレ、ポートブルトイレなど排泄に関することや立ち上がり、活動時が多い。転倒場所はどの研究でも病室やベッドサイドでの転倒が多いという結果であった。移動能力レベルでは 1990 年以降は車椅子が最も多く、次いで歩行補助具使用者の順であった。転倒発生時間帯は起床時、昼食後、夕食後の移動時を含め、日中に多い。転倒による損傷の有無は損傷しないが 40％前後と多く、骨折などに到る例は 10％前後である。老人病院と特別養護老人ホームにおける３年間、50 例の調査報告ではその 50％が大腿骨骨折であった。

表１　転倒の危険因子

内的要因（転倒者側）	外的要因（環境側）
加齢	照明
過去の転倒経験	床の状況
歩行・バランス障害	歩行補助具
感覚器の低下	履き物
循環器系の障害	段差
脳血管系の障害	入浴
筋骨格系の障害	抑制帯
認知の障害	その他
内服薬	

５．地域高齢者の転倒発生状況

地域高齢者の転倒発生率は 20％前後で、障害物につまづく、自転車からの転落など屋外での転倒が多い。転倒によって受傷した高齢者は、その後の健康を損なうきっかけになっていた。転倒経験の関連要因は失禁、手段的自立度、女性の３つであった。また在宅ケア高齢者の転倒は、ぼけ（中等度）、寝具（ベッド）、難病（あり）の要因と関連し、転倒場所は居室、布団、廊下の順に多かった。

６．対象別・健康障害別の転倒

脳血管障害者、パーキンソン病は高齢者に多く、転倒しやすい。施設や疾患では老人施

設、老人病院における報告が最も多い。関連してリハビリテーション病棟、脳神経外科、外科病棟、パーキンソン患者、リウマチ患者、透析患者などの転倒が報告されている。また精神病や痴呆のある高齢者の転倒が多く報告されている。これらの患者は精神症状や見当識障害があり、危険について無防備なことが多く、転倒予防の困難さが伺える。

7．転倒予防についての研究

転倒予測のアセスメントには入院高齢者や地域高齢者の転倒と関連した身体機能や転倒経験の特徴を知り、的確に評価していくことが望まれる。そのアセスメントの中に看護者も測定可能な簡便な方法を取り入れ、客観的に評価できることが必要となる。また転倒予防看護においては転倒経験者（認知障害のない）が、自分の転倒や骨折体験をどのようにとらえているかを明らかにすることが重要な視点となる。

転倒に関わった看護者がそれをどのように捉えているかについて検討した研究では、入院高齢者の身体状態に注目してその状況を描き、対策を考える傾向がある、また転倒状況に到るプロセスや転倒状況に対する関心の向け方が少ない者が多い傾向があり、転倒者の位置から転倒状況を描く訓練の必要性が強調されている。事故報告書の内容分析をカテゴリー化したものを看護のものさしとして意識することで転倒防止ケアに活用できるという報告もある。

看護者の転倒予測について看護婦は全転倒の60％を予測し、40％は予測していなかったという報告や、転倒が起こりそうだと思われる患者に直観力で予測マークをつけ意図的な予防を試みた結果、13人中10人は予測できていたという報告、脳血流障害患者の転倒予防では50.8％の看護婦が予防できると答えたという報告がある。

8．今後の課題

転倒や転倒による骨折などを予防するには早期の転倒のリスクをアセスメントしてケアのつなげること、転倒しても骨折などの損傷を防ぐ装具の開発、ハイリスク者の予防エクササイズ、予防教育などが今後の課題となる。

Ⅲ．真田弘美，大桑麻由美：褥瘡のケアに関する研究の動向と今後の課題，195~202.

1．方法

褥瘡ケアを主として看護者が直接患者に行なうケアに限定し、今世紀における動向の把握および21世紀の課題を抽出する目的で研究文献の検討を行なった。

2．文献の範囲　1975～1999年

1）『医学中央雑誌』CD－ROM版、『日本看護関係文献集』から「褥瘡」・「褥創」を検

索し、そのうち看護・褥瘡ケアに関する研究文献を選択した。扱った文献は看護系学会雑誌・会誌、紀要および医学研究会誌等の原著論文、症例報告のみとした。ただし査読があり原著的な取り扱いがされる『日本看護学会集録』の会議録は含めている。

2）米国はMEDLINEで「pressure sore」or「pressure ulcer」and「nursing」で検索した。

3．褥瘡ケアに関する研究文献数

1975～1999年の褥瘡ケアに関する論文数は213件、主な出典は『日本看護学会集録』『日本看護研究学会雑誌』『日本看護科学学会誌』『日本創傷・オストミー・失禁ケア研究会誌』であった。

文献推移は1975～1979年では10件であったが1985年ごろより増加がみられ、1995～1999年は123件と25年間で約12倍になっている。

4．　褥瘡研究の分類

1）褥瘡有症率・発生部位と深度・褥瘡治癒期間

患者の半数以上が仙骨部の褥瘡を有している。深度は、Ⅲ度、Ⅳ度が半数を占めているため治癒期間が長い。これにより褥瘡を持つ高齢者にとってその苦痛はもとより患者の家族に大きな介護負担を強いていることがわかる。

2）褥瘡ケア

発生要因・発生予測ｱｾｽﾒﾝﾄの研究、体圧分散の研究は多くなされているが、臨床での評価研究が少ない。栄養、ｺｽﾄ面の分野は今最も求められる研究であるが皆無である。創傷ケアは褥瘡発生語の褥瘡局所ケアに対する研究が少なく、難治性の褥瘡を臨床で眼にすることが多い理由とも言える。

（1）発生要因・発生予測

褥瘡発生要因では、まず健康人を対象として基礎的データを得て、それを対象特性に応用する方法がとられている。　その方法として褥瘡発生要因である圧力・湿潤に着目し、測定器具を用いた検討がされている。

また発生予測のために筆者らは1991年に開発されたBradenScaleを翻訳、ﾌﾞﾚｰﾃﾞﾝｽｹｰﾙとして日本に導入、その後、臨床で多く活用され褥瘡発生率が減少したという報告がされるようになった。しかし1995年以降、ﾌﾞﾚｰﾃﾞﾝｽｹｰﾙは臨床で継続して使用されていないことを問題視した筆者らは、新たな褥瘡発生の概念図、予測ｽｹｰﾙを開発し、検証を行なっている。

(2)体圧分散

体圧分散の研究は体位変換時間の検討にはじまり、従来の2時間毎の体位変換を客観的指標から検討され、994年以降からは体圧分散寝具の選択から開発に伸展しているが、ケアを基準化できる研究成果は不充分である。

(3)栄養

事例報告の中には栄養の備えや血液ﾃﾞｰﾀの記載はあるが栄養面に主眼をおいた研究報告はない。

(4) スキンケア

スキンケアは皮膚の湿潤、摩擦、ずれに関するケアを指し、失禁により尿汚染、おむつのむれ、シーツのしわ、寝衣の摩擦などを内容とする。皮膚の湿潤度を測定し、ｺﾞﾑｼｰﾂ使用の問題点、ﾏｯﾄﾚｽの湿潤の影響を報告したものがある。しかしｽｷﾝｹｱの実施により褥瘡が良くなるという、臨床での評価研究はされていない。

(5) 創傷ケア

発生した褥瘡の看護的視点での研究は少なく、褥瘡の治癒過程と看護ケアとの関連性が見出せないため適切な介入方法が検討されていない。

(6)コスト

これまでの研究では使用した用具や社会資源についての実態調査研究はあるが、それにまつわるコストについての言及はない。

(7)教育

ﾌﾞﾚｰﾃﾞﾝｽｹｰﾙを用いての患者ｱｾｽﾒﾝﾄの統一化、ｱﾙｺﾞﾘｽﾞﾑを用いたｹｱ基準作成といった各施設における独特の褥瘡ケアにより功を奏した報告や、在宅患者の家族を含めたケア・指導の報告はあるが、いまだ事例報告の域を出ない。

5．米国の褥瘡ケア

急性期患者の重篤化や高齢化社会が進むなど、褥瘡発生が増加する因子が存在するにも関わらず保有率が増加せず、また浅い褥瘡の占める割合が多いことが理解できる。これはAHCPRｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝの完成により褥瘡早期発見の重要性を認識し、ETﾅｰｽ・WOCﾅｰｽにより適切なケア方法が研究・実施されることで褥瘡が治癒しているといえる。またこれらの研究の成果が褥瘡の早期発見につながっている。

6．　研究の課題

患者のQOLの維持・向上のためには予防ケアとして、わが国での褥瘡発生予測ｽｹｰﾙの確立、褥瘡発生要因に対する介入方法の検討、さらに発生後は早期診断方法の確立、褥瘡に治癒過程と看護ケアとの関係を明らかにし、局所方法などを開発する必要がある。

さらに介護保険導入に伴う医療経済的視点での研究が求められてくる。ｸﾘﾃｨｶﾙﾊﾟｽの導入や、褥瘡治療にかかるｺｽﾄを明らかにしていくことで褥瘡を予防する重要性が増す。褥瘡予防を積極的に行なう一環として、徐圧用具の選択を基準化、栄養状態の整えに関する研究がなされ、ひいてはｸﾘﾃｨｶﾙﾊﾟｽの導入とｹｱ評価が課題とされるであろう。

Ⅳ. 牛久保美津子, 数間恵子：慢性病患者のケアに関する研究の動向と今後の課題, 203-211.

1．慢性病看護の拡大する範囲

わが国の慢性病に対する取り組みは1995年からの「成人病」対策にはじまったと言える。「成人病」は1990年代後半から生活習慣に着目した「生活習慣病」が用いられるようになり、治療よりも予防対策、キュアからケアへ、入院から外来・在宅医療へ、医学モデルから生活モデルへ、自立支援などといったパラダイムの変換を求められるようになった。慢性病では生活習慣病だけでなく、難病や慢性関節リウマチ、HIV／AIS、すべての発達段階に加え、精神疾患を含む全系統におよぶ疾患なども含まれるようになった。加えて慢性病では一次予防（健康増進、疾病予防）から二次予防（早期発見、早期治療）、三次予防（治療、リハビリテーション）のすべての対策が必要とされ、公衆衛生看護はもとよりリハビリテーション看護、家族看護も包含されるなど、看護支援分野も幅広く多岐にさたっている。

2．実践にみるケアの変化

1）患者指導から患者教育・患者学習へ

慢性病では自己管理の必要性から「患者主体」がよる強調され、指導ではなく患者教育、さらに患者の自律性を尊重し患者学習と称され、それに相応した働きかけの開発がなされている。

2）知識の普及から行動変容へ

現在では慢性病患者がよりより健康維持行動（疾病コントロール）をとれるよう行動変容への働きかけが強調されるようになり、行動科学的アプローチが用いられるようになってきた。

3）目下に安全・安楽から予見的に負荷を課すケアへ

慢性病が増加している現在、少子高齢化による高齢者自律支援や高齢者の寝たきり化予防とともに、患者の機能回復や機能維持をはかるために患者に負荷に伴う多少の苦痛を与えざるを得ないことを加味した看護が展開されるようになった。すなわち慢性病では離床や運動療法の重要性が実践の場に定着している。

4）　無病息災から数病息災へ

病気とうまく折り合いをつけながら生活を送れるような支援の必要性が生じている。これにより支援の支店は医学・疾病モデルから生活モデルへと移り変わってきた。

3．慢性病の看護ケアの主要な概念

1）　セルフケア（Self-care）

2）　コンプライアンス(Compliance)

3）　クオリティ・オブ・ライフ(Quality of Life, QOL)

4）　インフォームド・コンセント(Informed Consent, IC)

5）　病みの軌跡(Illness Trajectory)
6）　ノーマライゼーション(Nomalization、生活の常態化)
7）　セルフエフィカシー(Self-efficacy)
8）　エンパワーメント(Empowerment)
9）　ヒューマン・ケアリング（HumanCaring)

4．21 世紀の研究課題

ここ数十年の慢性病にかんする研究をまとめると、急性疾患と慢性疾患の共通性と相違が明確にされ、研究の視点は慢性疾患の外側からでなく、内部に迫る質的研究が多くなった。80 年代初期の質的研究は伝統的な生物医学的、損路社会的理論の枠組みに基づき、描写役割を扱うものであった。90 年代は患者の勇気、希望、コントロール、事故超越、自己決定、セルフマネジメント、エンパワーメントを扱うよう変化してきた。また患者を患者としてみるのではなく、１人のパートナーとして関係性に基づく研究が増えている。

21 世紀にあたっての研究、研究方法について５点を提言する。

1）日本文化に根ざした慢性病看護の概念の発展

慢性病の関係する概念はそのほとんどがアメリカから導入された外来語である。それらの意味を日本文化という文脈の中で解釈する作業、あるいは日本独自の新たな概念を作り出す必要がある。

2）学際的研究

慢性病は慢性的な生活の不調であることから今後は、法学、哲学、経済学、工学などを含む多くの学問分野のよる学際的研究が必要である。

3）帰納的・演繹的研究の積み重ねと統合

少数例から個々の研究を積み重ね、統合し、支援内容を普遍化することを試みるとともに、演繹的に個々の事例に適応し、フィードバックする研究が必要である。帰納的と演繹ｔ系両者の方向性こそ、生活背景の異なる個々人に対する支援策の発見に役立つ。

4）代替（補完）医療としての局面に関する研究

慢性病は現代医学（西洋医学）による治療では限界があり、代替療法を用いる人も多い。看護の働きかけも患者の自然治癒力を高めることが原点にある。今後は代替（補完）医療の実証的研究、また諸々の代替医療の安全性に対し、看護の視点からの研究が必要となる。

5）複雑系の視点をもつための看護教育方法の開発

慢性病の対処には、その多様性を認め、多角的にものをみる広い視野を持つ複雑系の見方が必要とされる。慢性病のある１側面をみていくのと同時に、その全体をみていく視点を失ってはならない。また、次代を担う看護師は少子化・核家族化により人間関係が希薄な中で育ってきており、多種多様な背景を持つ人間の理解には相

当な困難が伴うと予想される。慢性病ケアの提供にあたり、時代にあった看護職者の育成方法の開発が必須である。

V．河口てる子，西片久美子，高瀬早苗：糖尿病患者のｹｱに関する研究の動向と今後の課題，213-220.

1．方法

1990年から1999年に発表された糖尿病看護に関する研究を検討し、20世紀における糖尿病漢語研究の実情と今後の課題について言及する。

2．文献の範囲　1990年～1999年

1）「日本医学中央雑誌」CD－ROM

ｷｰﾜｰﾄﾞ：「糖尿病」29,199件　、「看護」24,609件　、「糖尿病」「看護」255件

2）日本糖尿病教育・看護学会の学会誌および学術集会抄録集

1997年3月第1巻1号～1999年3巻2号　232件

3．糖尿病看護に関する研究の概観

「日本医学中央雑誌」からの文献の年代別では1990年7件、1991年15件、1992年21件、1993年23件、1994年37件、1995年20件、1996年32件、1997年49件、1998年27件、1999年24件で、年代によりばらつきがあり、有意に増加しているとは言いがたい。

「日本医学中央雑誌」からの抽出文献を発達段階に分類すると、小児看護17件、成人看護214件、母性看護7件、老人看護6件、精神看護11件で、ほとんどが成人看護であった。

論文では学術集会への発表が圧倒的に多く、ついで看護系雑誌の記事、寄稿が多い。近年、効果的な糖尿病教育方法を目指した心理的アプローチや自己効力、患者の価値観、感情に着目した研究が少しずつ増加傾向にあった。

4．現在までの糖尿病漢語関連総説論文

1）野口美和子らは分類毎の現状と課題を述べている。(野口美和子，森淑江，大名門裕子他（1982a）．本邦における成人期糖尿病患者の教育に関する研究の現状（その1），看護技術，28(3)：131-137、野口美和子，森淑江，大名門裕子他（1982b）．本邦における成人期糖尿病患者の教育に関する研究の現状（その2），看護技術，28(3)：121-128)

2）　岡田らは成人糖尿病看護の文献数を探索し、看護師の指導能力に関する研究がみられないと述べている。(岡田房子，鵜沢陽子（1995）．過去10年間の成人糖尿病患者の看護に関する研究動向，日本看護研究学会雑誌，18(4)：102-103)

3）　佐藤は、糖尿病に関する研究が非常に多いこと、看護師の対象（患者）の見方が

「統合された個人としての人間である」ことが定着していると述べている。（佐藤栄子（1995）．成人糖尿病患者に関する看護研究の現状，臨床看護研究の進歩，7：10-21）

4）　林らは、研究のほとんどが学会発表で終わっており、原著論文としての発表が少ないこと、より効果的な患者教育のために心理面や生活全般に目を向けた患者理解のための研究が必要であると述べている。（林啓子，軸屋栄子，菅原薫他（1998）．1990年代の日本国内における糖尿病教育・看護関連の研究の動向，日本糖尿病教育・看護学会誌，2(特別号)：74）

5．効果的な患者教育に関連する研究

宮本らは、糖尿病の教育入院によって動機付けられた患者の自己管理に対する知識と行動が退院後どのように継続されるのかを明らかにした研究（宮本千津子，有藤由香，植木理知子他（1991）．糖尿病患者の食事療法に関する気持ちと行動の関係，第22回日本看護学会集録（成人Ⅱ）：215-217）、正木らの69名の糖尿病患者の援助に対する反応と自我常態との関係を調査した研究（正木治恵，小田和美，宮本千津子他（1991）．糖尿病患者の自我状態と援助に関する反応について，千葉大学看護学部紀要，13：37-45）、水野らの教育入院終了後外来通院する糖尿病患者16名の「知識に活用からみた自己管理の段階図」を用いて障害要因を検討した研究（水野智子，正木治恵，野口美和子（1994）．糖尿病患者の自己管理における知識の活用と看護援助について，日本看護科学会誌，14(3)：254-255）がある。また斉藤らの血糖とインスリン、日常のエピソードなどのグラフ表示を用い、8名の患者の自己管理への行動変容をさぐるための事例検討を行なっている（斉藤ゆみ，伊藤純子，福田佐智子他（1994）．糖尿病の患者指導と患者の行動変容に向けて，自治医大看護短大紀要，3：65-70）。近藤らは外来通院中の合併証出現患者30名に質問紙調査を行い、自己管理状態と自己効力間、ストレスとの関係を探ったが有意な差は認められないと報告している（近藤香好子，足立はるゑ(1999)．糖尿病患者の自己管理状態と自己効力感，ストレスとの関連，日本看護研究学会雑誌，22(3)：128）。河口は111名の初診からの糖尿病食事療法の実行度を聞き取り、その推移パターンを明らかにするとともに実行度の低下した鯨飲やきっかけからその心理を分析している（河口てる子(1996)．糖尿病患者における食事療法実行度の推移パターンとその心理的相違，日本赤十字看護大学紀要，10：31-42）。木下はインスリン非依存型糖尿病患者の自己効力の強化を通して主体的な事故管理を実践していくための患者教育プログラムを作成し、その有効性を検証している（木下幸代（1997）．糖尿病をもつ壮年期の人々の自己管理行動を促進するための教育的アプローチに関する研究，日本看護科学会誌，17(2)：416-417）。木幡ら（木幡桂子，保村恭子（1999）．糖尿病患者へのセルフケアの支援，臨床看護，25(5)：601-610）や川崎ら(1999)は患者に心理段階からのステージモデルを使用している。

6．高齢者のケアに関する研究

高齢糖尿病患者の看護ではセルフケアの援助に関する研究とインスリン自己注射に関する研究が多くみられ、セルフケアの援助では半数が事例研究であった。また最近急増している一人暮らし高齢者への援助に関する研究や血糖コントロールに関する研究も認められた。

7．　高齢者ケアに関する研究の今後の課題

26 件の文献中 14 件は事例検討であった。事例以外の調査報告も少数例が多く、対象者 100 人以上の調査は 4 件であった（うち 1 件は看護師対象）。そのほとんどは文献検討が不充分と感じられ、文献検討を充実させることが研究の蓄積と向上につながると思われる。

一人暮らしの高齢者、老夫婦のみの世帯の増加からそれらの支援のための研究が緊急かつ、重要と思われる。そして在宅支援に関するｻｰﾋﾞｽの積極的活用と他職種との連携がますます必要となる。

8．効果的な患者教育に関する研究の今後の課題

効果的な患者教育に関する研究は徐々に増加しているものの量的にも質的にも全く不足している。

看護は医療職の中で最も患者の身近にいて、患者の療養生活の実際を知る位置にいながら、日常生活をこなすことができる慢性疾患患者や、あるていど介助すれば生活できる障害者への日常生活援助に関して経験の積み重ねからの理論化も、研究もしてこなかったことが、文献レビューから明らかになった。今後は患者一人一人が作り上げてきた生活の累積を分析し、現実に起こっている患者の生活の場での現象（生活パターン）や問題点から、新たな「生活援助」の方法論を実践の知と研究の積み重ねで創り上げていくしかないのである。

抽出した関連文献

神群博（2000）：精神看護に関する研究の動向と今後の課題，看護研究，33(3)，177－183.

泉キヨ子（2000）：転倒防止に関する研究の動向と今後の課題，看護研究，33(3)，185~193.

真田弘美，大桑麻由美（2000）：褥瘡のｹｱに関する研究の動向と今後の課題，看護研究，33(3)，195~202.

牛久保美津子，数間恵子（2000）：慢性病患者のｹｱに関する研究の動向と今後の課題，看護研究，33(3)，203－211.

河口てる子，西片久美子，高瀬早苗（2000）：糖尿病患者のｹｱに関する研究の動向と今後の課題，看護研究，33(3)，213-220.

田中智子，長畑多代（2003）：介護老人保健施設でのﾕﾆｯﾄｹｱ的試みの効果―軽度痴呆性高齢者の事例を通して―，日本老年看護学会第 8 回学術集会抄録集，72.

沼本教子，原祥子，浅井さおり，柴田明日香(2003)：高齢者の心理的健康を支援する「自分史ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ」の

効果の検討　第1報：4事例の介入前後における変化，日本老年看護学会第8回学術集会抄録集，85.
原祥子，沼本教子，柴田明日香，浅井さおり(2003)：高齢者の心理的健康を支援する「自分史ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ」の効果の検討　第2報：ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑの評価と課題，日本老年看護学会第8回学術集会抄録集，86.
井出訓，山田律子，萩野悦子，他(2003)：高齢者の記憶ﾄﾚｰﾆﾝｸﾞ・ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ―物忘れ予防教室のこころみ―，日本老年看護学会第8回学術集会抄録集，126.
細川満子，三津谷恵，石鍋圭子，他(2003)：ALS療養者の呼吸管理を中心とした看護支援，日本難病看護学会誌，8(1)，第8回日本難病看護学会学術集会ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ・抄録集，46.
鈴木智津子(2003)：2型糖尿病患者のｲﾝｽﾘﾝ療法導入時における身体の理解を引き出す看護援助ﾓﾃﾞﾙ開発，第8回日本糖尿病教育・看護学会学術集会抄録集，102.
白水真理子，加賀屋聡子，三浦幸枝，他(2003)：虚血性心疾患を合併した糖尿病患者への効果的な教育ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑの検討　第1報　面接と小集団学習会による介入の試み，第8回日本糖尿病教育・看護学会学術集会抄録集，162.
馬場敦子(2003)：成人早期糖尿病患者に対する体験を重視した短期教育ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑの開発，第8回日本糖尿病教育・看護学会学術集会抄録集，167.
吉田沢子，西川早希子，小島智子，他（2003）：糖尿病教室における体験型運動療法の実践報告，第8回日本糖尿病教育・看護学会学術集会抄録集，176.
杉山早苗，梶井ゆかり，竹森章子，渋谷さよ子（2003）：糖尿病病棟における集団で行なうﾌｯﾄｹｱ教室の実際，第8回日本糖尿病教育・看護学会学術集会抄録集，184
古賀久美子，清水安子，正木治恵，他（2003）：糖尿病予防教室ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑの開発－自己の身体に関心を向けるためのﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑとは―，第8回日本糖尿病教育・看護学会学術集会抄録集，206.
高田かおり，山田圭子，三代文子（2003）：肺癌の放射線・抗癌剤併用療法の看護－食道炎症状に対する看護介入について―，第2報，第17回日本がん看護学会誌抄録集，54.
清水裕子，遠藤恵美子（2003）：音声による会話の不自由な頭頸部がん患者とのｼﾞｬｰﾅﾙと対話を組み合わせた看護介入試案，第17回日本がん看護学会誌抄録集，70.
鈴木久美，小島操子（2003）：診断・治療期にある乳がん患者のがんと共に生きることを支える看護介入ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑの開発，第17回日本がん看護学会誌抄録集，87.
渡邊眞理，遠藤恵美子（2003）：外来で化学療法を受ける乳がん患者のｾﾙﾌｹｱを促すﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ作成－嘔気・嘔吐予防のためにｲﾒｰｼﾞ法を用いて－，第17回日本がん看護学会誌抄録集，56.
都築あさお，中辻香邦子，佐々木智美，他（2003）：終末期がん患者の倦怠感に対する足浴・ﾌｯﾄﾏｯｻｰｼﾞの有効性に関する研究，第17回日本がん看護学会誌抄録集，112.
古賀理香，石津淳子，尾渡佳代子，田村真由美（2003）：胃切除術を受ける患者の食事指導―術前指導の効果―，第17回日本がん看護学会誌抄録集，202.
新田紀枝，阿曽洋子、葉山有香，他（2003）：化学療法に伴う遷延性嘔気、嘔吐に対する足浴後ﾏｯｻｰｼﾞの有効性，第17回日本がん看護学会誌抄録集，212.
松田馨子（2003）：産前・産後の「疼痛」に対するｱﾛﾏﾃﾗﾋﾟｰの効果，日本助産学会誌第17回日本助産学会学術集会集録，156.

大徳多珠子，江川隆子（2003）：看護的ﾌｯﾄｹｱ介入が２型糖尿病患者の足のｾﾙﾌｹｱ行動に及ぼす成果，日本看護研究学会雑誌，26（3），363.

小西孝子，古賀美紀，小林幸恵（2003）：倦怠感のあるがん患者に与えるｱﾛﾏﾏｯｻｰｼﾞの効果，日本看護福祉学会誌 9(1)，43.

那須実千代（2003）：音楽療法を応用したｹｱの試み～入院患者を対象に～，聖路加看護学会誌 7(2)，第８回学出大会講演集，43.

当目雅代（2003）：人工関節全置換術における入院前患者教育ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑの心理的効果，第 23 回日本看護科学学会学術集会講演集，136.

倉田信子，渋谷優子，井上智子（2003）：冠状動脈バイパス術後痛に対する呼吸筋伸展体操の効果：呼吸倉筋機能、ADL、気分および痛みの変化に焦点をあてて，第 23 回日本看護科学学会学術集会講演集，142.

松田明子（2003）：在宅における摂食・嚥下障害者の家族に対する教育の効果－家族の家族機能の変化－，第 23 回日本看護科学学会学術集会講演集，169.

増井耐子（2003）：帝王切開で生まれた新生児に対するﾀｯﾁｹｱの効果，第 23 回日本看護科学学会学術集会講演集，237.

鈴木久美，小島操子（2003）：診断・治療期にある乳がん患者の生の充実をはかる心理教育的看護介入ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑの効果，第 23 回日本看護科学学会学術集会講演集，298.

佐藤香代，浅野美智留（2003）：「体感」活性化ﾏｻﾞｰｸﾗｽの実践とその根拠１－助産術（助産の Art）を前提に置く意義－，第 23 回日本看護科学学会学術集会講演集，389.

浅野美智留，佐藤香代（2003）：「体感」活性化ﾏｻﾞｰｸﾗｽの実践とその根拠２－「体感」と「体感」活性化の裏付け－，第 23 回日本看護科学学会学術集会講演集，398.

高見由美子（2003）：安静入院中の妊婦の便秘に対する腰部温罨法の効果，第 23 回日本看護科学学会学術集会講演集，390.

安田孝子（2003）：つわり症状がある妊娠初期の妊婦に対するつぼ刺激の効果，第 23 回日本看護科学学会学術集会講演集，397.

半田浩美（2003）：先天性心疾患を持つ乳幼児の母親に対する退院前後の支援の検討－母親のｲﾒｰｼﾞ形成に焦点をあてて－，第 23 回日本看護科学学会学術集会講演集，431.

東ますみ，川口孝泰（2003）：遠隔看護ｼｽﾃﾑを用いた糖尿病患者に対する在宅型看護支援についての研究，第 23 回日本看護科学学会学術集会講演集，493.

宮崎つた子，我部山キヨ子（2003）：双方向ｼｽﾃﾑを用いた子供と家族へのﾌｧﾐﾘｰｻﾎﾟｰﾄ（第１報），第 23 回日本看護科学学会学術集会講演集，427.

我部山キヨ子，宮崎つた子（2003）：双方向ｼｽﾃﾑを用いた子供と家族へのﾌｧﾐﾘｰｻﾎﾟｰﾄ（第２報），第 23 回日本看護科学学会学術集会講演集，432.

齋藤伸子，大久保美枝，伊賀律子，他（2003）：絵本を用いたﾌﾟﾘﾊﾟﾚｰｼｮﾝの効果－３～６才の幼児を対象とした喘息指導－，日本小児看護学会第 13 回学術集会講演集，62-63.

平田美佳，中川幸枝（2003）：幼児期から学童前期の子どものがん性疼痛緩和の具体的な介入方法の検討－

Wong-Baker のﾌｪｲｽｽｹｰﾙを使用した介入方法と使用しての介入の変化－，日本小児看護学会第 13 回学術集会講演集，70-71.

菱沼希，中村くに子：長期人工呼吸管理を必要とする患児への呼吸器感染予防への援助～緑茶による口腔ｹｱを試みて～，日本小児看護学会第 13 回学術集会講演集，208-209.

江本リナ，飯村直子，筒井真優美，他（2003）:「検査・処置を受ける子どもへの説明と納得」に関するｹｱﾓﾃﾞﾙの実践と評価（その１）―検査・処置を受ける子どもと家族への説明に関する看護師の認識の変化－，日本小児看護学会第 13 回学術集会講演集，262-263.

松村直美，二宮啓子，蛯名美智子，他（2003）:「検査・処置を受ける子どもへの説明と納得」に関するｹｱﾓﾃﾞﾙの実践と評価（その２）－子どもの力を引き出す関わりと具体的な看護技術について－，日本小児看護学会第 13 回学術集会講演集，264-265.

高橋清子，楢木野裕美，鈴木敦子，他（2003）:「検査・処置を受ける子どもへの説明と納得」に関するｹｱﾓﾃﾞﾙの実践と評価（その３）－看護師の親に対する認識を実践の変化とｹｱの広がり－，日本小児看護学会第 13 回学術集会講演集，266-267.

佐々木忍，勝田仁美，松林知美，他（2003）:「検査・処置を受ける子どもへの説明と納得」に関するｹｱﾓﾃﾞﾙの実践と評価（その４）－病棟への波及効果－，日本小児看護学会第 13 回学術集会講演集，268-269.

江幡智栄（2003）：褥瘡対策ﾁｰﾑの活動からみた、他職種のかかわり，千葉看護学会第 9 回学術集会集録 28-29.

眞嶋朋子（2003）：心筋梗塞ﾎｰﾑﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝの試み，千葉看護学会第 9 回学術集会集録，34-35.

友安直子，中谷芳美，島内節，他（2003）：在宅要支援・要介護 1 高齢者の自立支援ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ作成 1 報：自立支援項目の抽出と支援手順枠組みの作成，日本地域看護学会第 6 回学術集会講演集，37.

森田久美子，島内節，友安直子，他（2003）：在宅要支援・要介護 1 高齢者の自立支援ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ作成 2 報：自立支援項目におけるプロトコールの作成，日本地域看護学会第 6 回学術集会講演集，38

森田久美子，島内節、友安直子，他（2003）：在宅要支援・要介護 1 高齢者の自立度とｹｱの効果評価 1 報：対象者の自立度とその変化，日本地域看護学会第 6 回学術集会講演集，39

島内節，森田久美子，友安直子，他（2003）：在宅要支援・要介護 1 高齢者の自立度とｹｱの効果評価－２報：日常生活自立度とその改善に関連する要因－，日本地域看護学会第 6 回学術集会講演集，40.

川崎真弓，矢野千里，作取久，他（2003）：誠心障害者の地域生活を促進する急性期ｹｱﾌﾟﾛﾄｺｰﾙの評価－ｹｰｽによる比較，日本精神保健看護学会第 13 回総会・学術集会ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ・抄録集，26-27.

河口てる子，患者教育研究会(2003)：患者教育のための「看護実践モデル」開発の試み　看護師によるとっかかり／手がかり言動とその直感的解釈，Professional Learning Climate，177-185.

小林貴子，小長谷百絵，小平京子，他（2003）:「看護実践モデル」における「とっかかり／手がかり言動とその直感的解釈，187-197.

下村裕子，河口てる子，林優子 他（2003）：看護が捉える「生活者」の視点　対象理解と行動変容の「かぎ」，199-211.

岡美智代，伊波早苗，滝口成美 他(2003)：行動変容を促す技法とその理論・概念的背景，213-223.

安酸史子，大池美也子，東めぐみ 他(2003)：患者教育に必要な看護職者の Professional Learning Climate，225-236.

【2】学会発表(2003年)にみるケア開発研究の動向調査・分析

看護系学会学術集会抄録集から，ケアプログラム開発に該当する可能性のある研究発表を抽出し，分類・分析した．以下にその結果を示す．

Ⅰ．目的：プログラムドケアの開発等に類似・関連したケアプログラムに関する研究を看護系学会学術集会抄録集から抽出し、分類・分析することによって、現状を概観する。

Ⅱ．用語の定義

1．スタンダードケア 看護師の資格を有するものであれば、その品質を保証して実施できる看護ケア。保健・医療・福祉のいずれの領域・組織においても共通して存在する看護ケア。

2．プログラムドケア 特定の看護目標を達成するため、多様な関連理論を用いて編成する一連の計画的ケアで対象の状態や変化に対応する行為の選択肢が多岐にわたっているもの。

3．ケアプログラム ケア開発、ケアのプログラム化を目的あるいは研究の一部を含み、当該ケアをケースに合わせ介入もしくは実施し、評価している研究とする。

Ⅲ．作業プロセス

ケアプログラム抽出・分類・分析は以下の段階を経て作成された。

1．ケアプログラム抽出作業：日本学術会議に登録されている１８団体を対象とし、2003年度年次学術集会を開催した抄録集から前項にて定義したケアプログラムを抄録内容を読み込み抽出していった。(表１．表２)

なお、同一抄録集で同一研究を分割して発表している場合のカウントは１とした。

2．抽出されたケアプログラムの分類作業（途中報告）

1）分類基準の設定：プログラムドケアの主要素とは、ケースに合わせた緻密なアセスメント、計画、実施、評価で構成され、それがなされているかにより、以下のように分類する。

レベル１	プログラムドケアの要素をほぼ満たしている研究	5
レベル２	プログラムドケアの主要素を包含し、プログラムドケアに発展する可能性を秘めている研究	8
レベル３	プログラムドケアには遠くおよばないものの、萌芽期的な要素を包含している研究	7
レベル４	スタンダードケアに準じる研究	１６
不明	表題からケアプログラムと予測できるが検索対象年では第２報等で具体的	4

	ケア内容が不明の研究など	
合　　計		40

表1．対象学会およびケアプログラム抽出数

学会名	抽出数／演題総数	学会名	抽出数／演題総数	学会名	抽出数／演題総数
日本看護診断学会	0／22	日本看護学教育学会	0／184	日本家族看護学会	0／105
日本看護管理学会	0／80	日本精神保健看護学会	1／40	日本老年看護学会	3／104
日本がん看護学会	7／193	日本地域看護学会	1／126	日本在宅ケア学会	0／34
日本難病看護学会	1／40	千葉看護学会	2／14	日本看護福祉学会	1／31
日本糖尿病・教育看護学会	6／149	日本小児看護学会	4／128	日本看護科学学会	11／468
日本助産学会	1／82	聖路加看護学会	1／19	日本看護研究学会	1／356
計					40

2）分類作業手順

ケアプログラム分類・分析作業は、妥当性確保のために2段階、2名の研究者で行なっている。

(1)第1段階

抄録内容を読み込んだ上、抽出されたケアプログラムは1名の研究者があらかじめ設定した分類基準に従って分類した。

分類基準は下記に示すように、プログラムドケアの主要素をほぼ満たしている研究から萌芽的要素を含む研究までをレベル1～3に分類した。レベル4は本研究におけるスタンダードケアに準じる研究とし、第二階層名称から該当するケア項目を明記することとした。

(2)第2段階

第2段階では、当該結果をもう1名の研究者とレビューする方式で、チェックした。研究者間の意見が合意した分類タイプに落とし込んだ。

3）分類の集計結果（途中報告）

(1) 第1段階の作業結果

18看護系学会の抄録集、講演集等から40件のケアプログラムラムが抽出できたが、プログラムドケアに相当する報告はみあたらなかった。

分類基準毎にみると、レベル1は5件、レベル2は8件、ケアレベル3は7件、レベル4は16件、不明（表題からケアプログラムと予測できるが検索対象年では第2報等で具体的ケア内容が不明の研究など）4件であった。

(2)第2段階の作業結果

第1段階の作業結果を，第1作業者とともにレビューした．分類結果に変更はなかった．

Ⅳ．分類結果にもとづく分析

分類枠に該当した研究を概観すると、レベル１では、高齢者の心理的支援や自立訓練、糖尿病患者への教育やシステムに関する報告などがみられた。レベル２では、糖尿病患者へのフットケア、ＡＬＳ患者の呼吸管理、胃切除を受ける患者への術前からの食事指導、バイパス術後の疼痛緩和手段としての呼吸筋伸展体操、告知を受けた患者への心理教育的看護介入、長期入院が必要な子どもと家族へのサポート、退院後の心筋梗塞ホームリハビリなどの報告がみられた。レベル３では乳がん患者のセルフケアを促す嘔気・嘔吐予防プログラム、音楽療法を応用したケア、人工関節全置換術における患者教育プログラム、妊婦対象に体感の活性化、先天性心疾患を持つ乳幼児の母親の適応への介入などの研究が報告されていた。レベル４では足欲、フットケア、マッサージ、タッチケア、温罨法、口腔ケアなど、苦痛の予防・軽減ケア、清潔ケア、排泄ケア、医療的手技・処置の指導、生活指導、心理的ケアに包含される研究が該当していたが、そのケア内容は単一なスタンダードケアだけではなく、複数のスタンダードケアが組み合わされていた。

レベル１～３までの研究総数は20件で、全体からみても質量ともに少数であるだけでなく、介入方法に関しても新しい研究と言えるものは少ない現状にあると言えた。

表2.　ケアプログラム抽出・分類一覧　　平成16年2月10日

著者名	表題名	雑誌名、巻・号	目的	計画・実施されたケアの概要	分類
田中智子，長畑多代	介護老人保健施設でのﾕﾆｯﾄｹｱ的試みの効果―軽度痴呆性高齢者の事例を通して―	日本老年看護学会第8回学術集会抄録集，p 72，2003	ﾕﾆｯﾄｹｱ的ｹｱの効果を探り痴呆性高齢者への個別性を重視した看護ｹｱのあり方を検討する	・顔なじみのｽﾀｯﾌ、少人数の参加者、ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑを決めない自由な過ごし方など、ﾕﾆｯﾄｹｱのｿﾌﾄ面を取り入れた試み ・日当たりの良い開放的な部屋にしかれた莫蓙の上で、週４回程度、1~2時間、3～5名の参加者を対象とする	レベル４ ・意思疎通ｹｱ、 ・発育・発達ｹｱ、 ・心理的ｹｱ、 ・ﾘﾌﾚｯｼｭｹｱ
１．沼本教子，原祥子，　浅井さおり，柴田明日香２，原祥子，沼本教子，柴田明日香，浅井さおり	・高齢者の心理的健康を支援する「自分史ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ」の効果の検討　第1報：４事例の介入前後における変化 ・高齢者の心理的健康を支援する「自分史ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ」の効果の検討　第2報：ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑの評価と課題	・日本老年看護学会第8回学術集会抄録集，p 85，2003 ・日本老年看護学会第8回学術集会抄録集，p 86，2003	高齢者の心理的健康を維持していくための看護援助として「自分史」を活用する	ｶﾞｲﾀﾞﾝｽ：1)ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ全体および書き方説明 資料配布①「自分史」書き方ﾏﾆｭｱﾙ ②自分史作成ｶﾞｲﾄﾞ ③私の生活史（年表） 2)面談ｽｹｼﾞｭｰﾙ ↓ 面談（１回／月）：参加者が記述した「自分史」を持参し個別面談を実施。５回の面談を通して各自の「自分史」を仕上げていく 第1回～第5回　1)面談場所：施設内の１室 2)面談時間：約１時間／回 3)面談内容：①困っていること ②自分史の内容 ↓ 自分史の編集・製本（研究者ｻｲﾄﾞの作業） 評価	レベル１
井出訓，山田律子，萩野悦子，他	高齢者の記憶トレーニング・プログラム―物忘れ予防教室のこころみ―	日本老年看護学会第8回学術集会抄録集，p 126，2003	高齢者の記憶に対する教育的プログラム（物忘れ予防教室）の効果の検討	物忘れ予防教室　： ２時間づつからなる全５回のｾｯｼｮﾝ　・第１～４ｾｯｼｮﾝ：記憶の働き、老化に伴う記憶の変化記憶に与える要因、記憶力向上の方法を学習する　・最終ｾｯｼｮﾝは約１ヶ月後ﾌｫﾛｰｱｯﾌﾟ	レベル３
細川満子，三津谷恵，石鍋圭子，他	ALS療養者の呼吸管理を中心とした看護支援	日本難病看護学会誌，8(1)，第8回日本難病看護学会学術集会ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ・抄録集，p46，2003	ALS在宅療養者に呼吸管理に焦点をあてた研修受講後の看護師がﾄｰﾀﾙｹｱを提供し、その効果を検討する	・週３回90分間、呼吸器に焦点をあてたｹｱを実施する ① 呼吸器を中心としたﾌｨｼﾞｶﾙｱｾｽﾒﾝﾄ ② ｽｷｲｰｼﾞﾝｸﾞ ③ 胸背部の温罨法 ④ 体位変換による体位ﾄﾞﾚﾅｰｼﾞ ⑤ 口腔・起動の吸引 ⑥ ｹｱの成果の確認	レベル３
鈴木智津子	2型糖尿病患者のｲﾝｽﾘﾝ療法導入時における身体の理解を引き出す看護援助ﾓﾃﾞﾙ開発	第8回日本糖尿病教育・看護学会学術集会抄録集，p102，2003	ｲﾝｽﾘﾝ療法導入時における身体の理解を引き出す看護援助ﾓﾃﾞﾙの開発	・ｲﾝｽﾘﾝ導入前「身体の反応をみる」　・ｲﾝｽﾘﾝ導入後「身体の反応の変化をみる」 「変化した身体の反応と療養法と結びつける」	レベル４ ・医療的手技・処置の指導 ・生活指導
白水真理子，加賀屋聡子，三浦幸枝，他	虚血性心疾患を合併した糖尿病患者への効果的な教育プログラムの検討　第1報　面接と小集団学習会による介入の試み	第8回日本糖尿病教育・看護学会学術集会抄録集，p162，2003	虚血性心疾患を合併した糖尿病患者の自己管理を支援する教育プログラムの開発とその効果の検討	1．アセスメントシートの作成　①ｺﾝﾄﾛｰﾙ状態 ②ｾﾙﾌｹｱの状態 ③合併症の状態 ④リスクファクターの状態 ⑤糖尿病の知識　⑥受け止め方 2．学習会に使用するパンフレットの作成 3．教育プログラムの介入手順 糖尿病合併患者の把握→対象者を募る→ｱｾｽﾒﾝﾄｼｰﾄによる情報収集→面接→学習会の開催→退院後の課題ｼｰﾄの配布とｱﾝｹｰﾄ→退院→電話面接・質問紙調査 ＊学習会：2~3人程度で実施、１～1.5時間 ①互いの体験を含む自己紹介　②ミニ講義　③感想、意見交換 ④退院後生活　⑤まとめ ＊学習会：2~3人程度で実施、１～1.5時間	レベル１
馬場敦子	成人早期糖尿病患者に対する体験を重視した短期教育プログラムの開発	第8回日本糖尿病教育・看護学会学術集会抄録集，p167，2003	短期教育入院プログラムの作成と有効性	1．語ることを促すｸﾞﾙｰﾌﾟﾃﾞｨｽｶｯｼｮﾝ：　各項目の最後にｸﾞﾙｰﾌﾟﾃﾞｨｽｶｯｼｮﾝを実施必要時個別面接 2．身体を見る、触れる体験療養法の体験を促す ①身体の調子をみてみよう：口腔、足の観察、腹囲測定など ②運動をしてみよう：ｽﾄﾚｯﾁ、ﾚｼﾞｽﾀﾝｽ運動、30％強度で歩行、 前後の血圧測定 ③ﾌｯﾄｹｱを体験してみよう：足浴、爪の手入れなど ④その他：病院食の摂取、各種検査など 3．知識・技術の提供 ①身体の働きと糖尿病との関係を知ろう ②その他各項目での説明など 血糖調節を中心とした身体の成り立ちと糖尿病との関係、検査結果の見方、食事・運動・薬物療法・ﾌｯﾄｹｱなど 4．つなぐことを支援 主にｸﾞﾙｰﾌﾟﾃﾞｨｽｶｯｼｮﾝ：各項目の最後にｸﾞﾙｰﾌﾟﾃﾞｨｽｶｯｼｮﾝを実施、必要時個別面接	レベル１

吉田沢子，西川早希子，小島智子，他	糖尿病教室における体験型運動療法の実践報告	第8回日本糖尿病教育・看護学会学術集会抄録集，p176，2003	実際に運動を体験させ爽快感や楽しいというﾌﾟﾗｽｲﾒｰｼﾞを持たせるよう運動療法を企画	1．第１回：赤穂城内でｳｵｰｷﾝｸﾞ（30分）　①準備体操（ラジオ体操）　②ｳｫｰｷﾝｸﾞ前後の血糖測定 2．第２回：椅子でできるｴｱﾛﾋﾞｸｽ 3．第３回：赤穂城外周をｳｫｰｷﾝｸﾞ（45分）（1600Kcal）を摂った後ｽﾄﾚｯﾁを行なって開始	レベル４ ・医療的手技・処置の指導、 ・生活指導
杉山早苗，梶井ゆかり，竹森章子，渋谷さよ子	糖尿病病棟における集団で行なうﾌｯﾄｹｱ教室の実際	第8回日本糖尿病教育・看護学会学術集会抄録集，p185，2003	従来のﾌｯﾄｹｱとは別に看護師による集団で行なう「ﾌｯﾄｹｱ教室」の紹介	・月２回／１回３０分　第１、３木曜日１３：４５～１４：１５ ・観察ｼｰﾄによる個々の患者の足の状態の把握評価 ①最初の10分：ﾌｯﾄｹｱの意識、目的、方法、注意事項の説明 ②次の15分：承諾の得られた患者の足浴を実施しながら、洗い方、爪の切り方、観察ﾎﾟｲﾝﾄ、手入れ方法を説明 ③最後の５分：ﾃﾞｨｽｶｯｼｮﾝ	レベル２
古賀久美子，清水安子，正木治恵，他	糖尿病予防教室プログラムの開発－自己の身体に関心を向けるためのプログラムとは―	第8回日本糖尿病教育・看護学会学術集会抄録集，p205，2003	糖尿病の発症・悪化の予防教育における自己の身体に関心を向けるプログラムの開発	1．集団指導（2時間程度）・体験型の講義 イラスト、模型、ビデオ、スライドなどの教材を用いて説明 ・食事・運動と血糖値との関係の体験を取り入れる ・参加者が意見や質問を言いやすいようｸﾞﾙｰﾌﾟﾃﾞｨｽｶｯｼｮﾝを取り入れ、ﾌｧｼﾘﾃｰﾀｰを各ｸﾞﾙｰﾌﾟに配置 2．１週間後、個別面接（１人30分間） ・教室終了後、参加を勧め希望した参加者に実施	レベル２
高田かおり，山田圭子，三代文子	肺癌の放射線・抗癌剤併用療法の看護－食道炎症状に対する看護介入について―　第２報	日本がん看護学会誌，17，第17回日本がん看護学会学術集会講演集，　p54，2003	・NCI－CTCを基準としたｸﾞﾚｰﾄﾞ表を用いてケアプランの症例を増やし有効性を検討	このタイトルから第１報の第16回日本がん看護学会誌抄録集，2002にはﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑとして掲載されているのではないか？？	・詳細が不明
清水裕子，遠藤恵美子	音声による会話の不自由な頭頸部がん患者とのｼﾞｬｰﾅﾙと対話を組み合わせた看護介入試案	日本がん看護学会誌，17，第17回日本がん看護学会学術集会講演集，　p 70，2003	音声による会話の不自由な頭頸部がん患者にｼﾞｬｰﾅﾙを通して自己表現を促し、ｼﾞｬｰﾅﾙに基づいて患者がﾅｰｽと会話する看護介入の開発	面接回数：週２回１．ﾌﾟﾛﾄｺｰﾙ原案：患者が病気になって考えたことや感じたことを毎日ｼﾞｬｰﾅﾙを記載する 2．実施：面接時にﾅｰｽがｼﾞｬｰﾅﾙを音読し対話する 面接者は終了時に自己内省的なｼﾞｬｰﾅﾙを書く 3．原案の評価・修正・実施	レベル２
鈴木久美，小島操子	診断・治療期にある乳がん患者のがんと共に生きることを支える看護介入ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑの開発	日本がん看護学会誌，17，第17回日本がん看護学会学術集会講演集，　p 87，2003	告知を受けた乳がん患者が危機を乗り越え、がんとその治療に取り組み、自らQOLを高めてがんと共に生きていけるようにするための系統的・継続的な心理教育的看護介入ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑの開発	1．働きかけの方法　：a．認知的支援　b．情緒的支援　c．教育的支援 2．介入時期：告知後１週間前後から２ヶ月まで 3．介入回数：４回 4．介入様式：個別介入	レベル４ ・心理的ｹｱ
渡邊眞理，遠藤恵美子	外来で化学療法を受ける乳がん患者のｾﾙﾌｹｱを促すﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ作成－嘔気・嘔吐予防のためにｲﾒｰｼﾞ法を用いて－	日本がん看護学会誌，17，第17回日本がん看護学会学術集会講演集，　p 56，2003	外来で補助化学療法を受ける乳がん患者の、副作用である嘔気・嘔吐予防のためのｲﾒｰｼﾞ法によるｾﾙﾌｹｱﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ作成	研究枠組：オレムの「看護一般理論」　1．第１段階：①原案を作成　②ｲﾒｰｼﾞ法実施後面接　③質問紙調査　④原案修正 2．第2段階：①修正原案のパイロットスタディ ②修正→完成	レベル３ ＊今回はﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ作成手順が紹介されており、ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑとしての具体的なｲﾒｰｼﾞ法は述べられていない
都築あさお，中辻香邦子，佐々木智美，他	終末期がん患者の倦怠感に対する足浴・ﾌｯﾄﾏｯｻｰｼﾞの有効性に関する研究	日本がん看護学会誌，17，第17回日本がん看護学会学術集会講演集，p 112，2003	終末期の倦怠感のﾏﾈｰｼﾞﾒﾝﾄとして足浴、ﾌｯﾄﾏｯｻｰｼﾞを併用する効果と有効性の検証	1．　実施前：全身状態のアセスメント（検査ﾃﾞｰﾀ・長期臥床の有無・不眠の有無、内服薬の種類・病歴） 2．実施当日：10～11時、５分間、41℃湯にて足浴足底～膝下までReflexologyを利用したﾏｯｻｰｼﾞ30分 ３．評価：① 実施前にVASで評価　② 実施後の行動変化 ③ 実施直後の感想	レベル４ ・苦痛の予防・軽減ｹｱ ・心理的ｹｱ
古賀理香，石津淳子，　尾渡佳代子，田村真由美	胃切除術を受ける患者の食事指導―術前指導の効果―	日本がん看護学会誌，17，第17回日本がん看護学会学術集会講演集，p 202，2003	患者の自立を目的とした術前からの介入の試み	・術前から食事指導を行なう　・指導方法 ①入院時：食習慣に関する情報収集から分析表を作成し、 術後に起こりうる問題を予測する ②１回目指導：手術３～５日前、承諾をえてｸﾞﾙｰﾌﾟでﾊﾟﾝﾌﾚｯﾄを用いて胃の機能、切除後の形態と機能変化、その結果起こりうる症状について説明 ③２回目指導：術後経口摂取開始直前にﾊﾟﾝﾌﾚｯﾄに術式図を添付　して個別指導	レベル２
新田紀枝，阿曽洋子，葉山有香，他	化学療法に伴う遅延性嘔気、嘔吐に対する足浴後ﾏｯｻｰｼﾞの有効性	日本がん看護学会誌，17，第17回日本がん看護学会学術集会講演集，p 212，2003	化学療法中の肺がん患者に対し、足浴後ﾏｯｻｰｼﾞが遅延性嘔気、嘔吐を軽減できるかを検証する	CDDP投与後3~5日目：足浴後マッサージを実施　評価：VAS　足浴後マッサージ方法： ①起座位、40℃、10ﾘｯﾄﾙの湯の入ったポリバケツに家事を浸漬する足浴を７分間行なう ②仰臥位で、左足から足底および足指の指圧、揉捏、軽擦などを10分間、次に右足を同様に実施	レベル４ ・苦痛の予防・軽減ｹｱ、 ・心理的ｹｱ

松田馨子	産前・産後の「疼痛」に対するｱﾛﾏﾃﾗﾋﾟｰの効果	日本助産学会誌，16(3)，第17回日本助産学会学術集会集録，p 156，2003	産前・産後の「疼痛」に対するｱﾛﾏﾃﾗﾋﾟｰの効果	真性ラベンダー・レモンエッセンス・マンダリンエッセンス使用評価：VAS 産前：検診時に好みの香りを選択 37週～毎日芳香物質３滴をコットンに滴下（香りコットン）し、香りを感じながら就寝、または休息をとる。入院時分娩が進行している場合は分娩Ⅰ期は自室ですごし、香りコットンを胸にはり２時間毎に交換する 産後：分娩Ⅱ期終了時点で香りコットンを交換 産後２時間経過した分娩Ⅳ期で終了とする	レベル４ ・苦痛の予防・軽減ｹｱ、 ・心理的ｹｱ
大徳多珠子，江川隆子	看護的ﾌｯﾄｹｱ介入が２型糖尿病患者の足のｾﾙﾌｹｱ行動に及ぼす成果	日本看護研究学会誌，26（3），第29回日本看護研究学会学術集会，p 363，2003	看護的ﾌｯﾄｹｱ介入が２型糖尿病患者の足のｾﾙﾌｹｱ行動に及ぼす影響について検討する	６ヶ月間ﾌｯﾄｹｱ介入を実施　①ﾊﾟﾝﾌﾚｯﾄによる情報提供 ②爪きり、胼胝処置などのﾌｯﾄｹｱ提供 ③次回来院時までの目標設定を患者とともにおこなわせる 評価：SDSCAを一部修正、日本語訳し使用	レベル４ ・医療的手技・処置の指導 ・生活指導
小西孝子，古賀美紀，小林幸恵	倦怠感のあるがん患者に与えるアロママッサージの効果	日本看護福祉学会誌9(1)，日本看護福祉学会全国大会講演集，p43，2003	がん患者にとって日常生活を乱す最も苦痛な症状である倦怠感に対しｱﾛﾏﾏｯｻｰｼﾞを行い、心身への影響を検討する	ﾏｯｻｰｼﾞ方法：ｱﾛﾏﾏｯｻｰｼﾞ講習を受け統一した手法、ﾌﾟﾗｲﾏﾘｰﾅｰｽが実施　評価：ﾏｯｻｰｼﾞ前後でｲﾝﾀﾋﾞｭｰ	レベル４ ・苦痛の予防・軽減ｹｱ ・心理的ｹｱ
那須実千代	音楽療法を応用したケアの試み～入院患者を対象に～	聖路加看護学会誌7(2)，第８回学出大会講演集，p43，2003	よりよく生きる活力に働く音楽療法が日常生活場面での看護ケアになりうる可能性を問うために、音楽療法を応用したケアを提供し、その特性を知る	音楽療法を応用したケア：音楽療法を基本要素に準拠し、入院中の患者を対象に特定の場所や時間を設定せず、生活の場の日常的な状況の中で、歌う、奏でる、聴く、作るという音楽体験を話題に、言葉を介した会話のやりとりをする働きかけ　1．「うれしい・楽しい・好きである」音楽は何か（「うれしい音楽」とする）、「落ち着く・穏やかになる・安らぐ」音楽は何か（「落ち着く音楽」とする）を話題に言葉を介してやりとりを行なう音楽療法を応用したｹｱを実施する ２．ケア終了時、VASで評価 ３．ケア時からのエピソードを分析し、ケアの特性を抽出する	レベル３
当目雅代	人工関節全置換術における入院前患者教育プログラムの心理的効果	第23回日本看護科学学会学術集会講演集，p 136，2003	人口関節全置換術（THR）患者を身体的、心理的、認知的な準備性を高めた状態にし、入院生活から退院後の生活を通して人工関節に上手く折り合いをつけるための看護援助としてTHR入院前患者教育ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑを開発し実施	対照群：入院後に病棟看護師から従来同様の教育を受けた患者　介入群：入院1~4週間前に外来で1セッションの入院前患者教育プログラムを受けた患者 ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ：90分のｵﾘｼﾞﾅﾙﾋﾞﾃﾞｵとﾊﾟﾝﾌﾚｯﾄによる個人指導およびｸﾞﾙｰﾌﾟ指導 （股関節の解剖生理、脱臼予防法、THR固有の必要物品の準備、手術後の経過）	レベル３
倉田信子，渋谷優子，井上智子	冠状動脈バイパス術後痛に対する呼吸筋伸展体操の効果：呼吸筋機能、ADL、気分および痛みの変化に焦点をあてて	第23回日本看護科学学会学術集会講演集，p 142，2003	PCP（CABG後痛）を緩和する手段として考案した術後に実施する呼吸筋伸展体操（RMBG）の効果を検討する	RMBGの方法：①ﾘﾗｸｾﾞｰｼｮﾝ②頸すくめと頸部横屈 ③僧帽筋と大胸筋を含めた肩の前方円運動 ④肩甲帯と上腕三頭筋の伸展　⑤上腕三頭筋と前鋸筋の伸展 術前と退院時測定内容：％肺活量、1秒率、口腔内圧法による最大呼気・呼気筋力、日本語版気分ﾌﾟﾛﾌｨｰﾙ検査（POMS） 術前・術後7日目、退院時測定内容：換気様式、ADL実施容易度、PCPの強さ・部位	レベル２
松田明子	在宅における摂食・嚥下障害者の家族に対する教育の効果－家族の家族機能の変化－	第23回日本看護科学学会学術集会講演集，p 169，2003	在宅の摂食・嚥下障害者の家族に摂食・嚥下ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝを目的とした教育を実施し、家族機能の維持・向上を検討	教育群：藤島の摂食・嚥下障害訓練に準じた介護内容を4ヶ月間実施した 評価：家族機能、家族に影響する要因項目、介護に関する項目についてFAD（Family Assussment Device）日本語版を用いて評価した	レベル４ ・家族への相談・助言 ・家族との調整、
増井耐子	帝王切開で生まれた新生児に対するタッチケアの効果	第23回日本看護科学学会学術集会講演集，p 237，2003	泣きに対するなだめの方法としてﾀｯﾁｹｱを実施し、その効果を検討	対象：正期産で予定帝王切開で出産し、循環状態に問題のない体重2500ｇ以上の新生児とその母親　方法：生後3日目から8日目まで15分間のﾀｯﾁｹｱを研究者または母親が1日1回実施する 評価 新生児：ﾀｯﾁｹｱ前後の10分間の心拍変動ﾃﾞｰﾀ、ﾀｯﾁｹｱ前・中・後の状態観察、母親が捉えた主観的な新生児の変化 母親：ﾀｯﾁｹｱ中の言動や終了時のｲﾝﾀﾋﾞｭｰ	レベル４ ・発育・発達ｹｱ

鈴木久美，小島操子	診断・治療期にある乳がん患者の生の充実をはかる心理教育的看護介入ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑの効果	第23回日本看護科学学会学術集会講演集，p 298，2003	告知を受けた乳がん患者が危機を乗り越えがんと治療に前向きに取り組み、自らＱＯＬを高めて生の充実をはかるために開発した心理教育的看護介入ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑの効果	告知後1週間から退院後1ヶ月の間に個別に4回のｾｯｼｮﾝを実施　①告知後１週間の外来　②術後１週間の退院前 ③退院後２週間の外来　④退院後１ヶ月の外来 評価：日本版ＰＯＭＳ、日本版ＭＡＣ、がん患者ＱＯＬ質問表ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ実施前後と終了後１ヶ月	レベル２
１．佐藤香代，浅野美智留 ２．浅野美智留，　佐藤香代	・「体感」活性化マザークラスの実践とその根拠１－助産術（助産のArt）を前提に置く意義－ ・「体感」活性化マザークラスの実践とその根拠　２－「体感」と「体感」活性化の裏付け－	・第23回日本看護科学学会学術集会講演集，p 389，2003 ・第23回日本看護科学学会学術集会講演集，p 398，2003	・1996年から実施している自己の希望や身体内部から湧き出る感覚を重視その活性化を試みる「体感」活性化ﾏｻﾞｰｸﾗｽの効果　・体感度と事例を用いて、「体感」および「体感」活性化という概念の妥当性を評価	ﾏｻﾞｰｸﾗｽ参加妊婦をｸﾞﾙｰﾌﾟに分け、Doulaを配置し、「体感」活性化を実施（Doulaは活性化を行い指導は行なわない。妊婦の言葉に耳を傾け、徹底して受容・肯定する） 評価：体感尺度、妊婦の言動 ﾏｻﾞｰｸﾗｽ参加妊婦をｸﾞﾙｰﾌﾟに分け、Doulaを配置し、「体感」活性化を実施 （Doulaは活性化を行い指導は行なわない。妊婦の言葉に耳を傾け、徹底して受容・肯定する） 評価：体感尺度、妊婦の言動	レベル３
高見由美子	安静入院中の妊婦の便秘に対する腰部温罨法の効果	第23回日本看護科学学会学術集会講演集，p 390，2003	安静入院を行なう妊婦の便秘改善に対する腰部温罨法の効果	妊婦に適した腰部温罨法の実施手順を作成　①ﾎｯﾄﾊﾟｯｸをﾔｺﾋﾞｰ線以下の腰臀部15×33cm大に20分間貼用 ②４日間連続して実施 評価：便秘状態の変化	レベル４ ・排泄ｹｱ
安田孝子	つわり症状がある妊娠初期の妊婦に対するつぼ刺激の効果	第23回日本看護科学学会学術集会講演集，p 397，2003	妊娠16週未満のつわり症状のある妊婦へ腹式呼吸と内関・印堂・全息律つぼ群への指圧によるつぼ刺激を実施し、その効果を判定	つぼ刺激　①腹式呼吸と内関・印堂・全息律への指圧 ②１日10分以内、７日間 ③効果判定の指標はつわり症状スコア、唾液中コルチゾール値、心拍変動の高周波成分の変化を用いたつぼ刺激	レベル４ ・苦痛の予防 ・軽減ｹｱ ・心理的ｹｱ
半田浩美	先天性心疾患を持つ乳幼児の母親に対する退院前後の支援の検討－母親のｲﾒｰｼﾞ形成に焦点をあてて－	第23回日本看護科学学会学術集会講演集，p 431，2003	先天性心疾患の乳幼児に療養生活への母親の適応を促進するための母親のｲﾒｰｼﾞ形成・修正を促す介入モデルを作成・実施し検討する	対象：短絡手術、根治手術を受けた乳幼児の母親　・患児の抜糸後から退院まで直接ケアを実施 ・抜糸後から退院１週間までに４回面接を用いて介入 母親のｲﾒｰｼﾞ形成パターンに合わせた４つのケアを抽出 ① 退院後の療養行動のｲﾒｰｼﾞを引き出すケア ② 母親のｲﾒｰｼﾞの不確かな部分をクリアにするケア ③ 不確かさを維持したまま母親のｲﾒｰｼﾞの再構築化を促すケア ④ 母親のｲﾒｰｼﾞを強化するケア	レベル３
東ますみ，川口孝泰	遠隔看護システムを用いた糖尿病患者に対する在宅型看護支援についての研究	第23回日本看護科学学会学術集会講演集，p 493，2003	糖尿病患者に対する遠隔看護システムを用いた継続的なケアを実施し、在宅型看護支援のツールとしての有効性を検討する	・対象者の自宅と外来看護師の勤務する病院との間に無線通信を用いたネットワークを形成し、遠隔看護システムを利用した実践をおこなった　・患者はケア情報として「バイタルメール・文書メール・ﾋﾞﾃﾞｵメール」を毎日送信し、外来看護師は１日１回の相談に対するコメントを「文書メール・ﾋﾞﾃﾞｵメール」で、看護大学からは総合的なコメントを文書メールで返信した ・糖尿病の自己管理ﾃﾞｰﾀとして「血糖値・ｲﾝｽﾘﾝ量・体重・食事量・運動量など」を入力し、自動でｸﾞﾗﾌ化できるシステムを追加した ・自己管理の評価基準はHbA１ｃ、血糖値、１日の歩数、体重等を用い量的分析をした	レベル１